

見守るまどろみ　～
送装置のテスタ
ばれて転送のれ
強だっ
に蹂躪した
き
ま
す
題
～

鈴本恭一

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

冴えない僕のもとに、ある日、ナイコーポレーションという会社から転送装置のテストターに選ばれたという通知が来た。

なんのことだか分からないし、胡散臭いことこの上ないけど、現実はどうももうんざりしてたのでどうとでもなれって気持ちでその装置を使ってみた。

すると送られた惑星Xでは、地球人はなんと無敵の存在だった！

貧弱な現地の人々を相手に、僕は好き勝手し始める事にした。

—— 『地球人殺し』が出るまでは。

目次

第1話：僕を襲うハンドミキサ―

1

第2話：走れ！ パン切りくん ― 27

第3話：犬の騎士 ― 40

第4話：やはだをふるわせまさぐる者

共。鬼。けもの ― 55

第5話：破却 ― 92

第6話：さいごのわがまま ― 120

第7話：異世界転生 ― 158

最終話：見守るまどろみ ― 182

第1話：僕を襲うハンドミキサー

僕と同じ地球人達が原住民の女を犯している。焼かれた街の中で。

街は砦と壁に囲まれた立派なものだ。

住民の数は千人を軽く超えていた。広場も公園もあり、整備された道と清潔な建物がこの街の発展を誇っている。

しかし現在には破壊の限りを尽くされ、住民はほとんど殺され、黒い煙に包まれている。壊滅だった。

3人の地球人によって。

その破壊の主である地球人達は、街の中央の広場でそれぞれ陵辱の愉しみにふけっている。

原住民の女は地球の人類とさして変わらない。

違うのは、頭に羊のような丸く太い角を生やしていることぐらい。

僕は勝手に羊人と呼んでいる。

ゆるくふわっとした髪の毛と豊満な肉付き、整った容貌。彼らを好む地球人は多い。

だから羊人のいる地域は人気スポットだった。

青い皮膚に覆われた3人の地球人——同じ場所に3人、僕を含めれば4人も集まるのは珍しい——は羊人の女を全裸にし、四つん這いにさせ、後ろから激しく突き上げていく。前後に荒々しく揺さぶられる女達。その大きな胸が卑猥に弾む。

「……失敗したな」

その光景を離れた位置から眺めながら、僕はひとり零す。

僕の足元にも、羊人の女が転がっている。

しかし現在陵辱されている彼女らと違い、服は着たままで、そして胴が千切れていた。苦悶の表情で絶命している。僕が捕まえた原住民。

つい先ほど、加減を間違えてうっかり腰を握り潰してしまった。他に生きてる住民はいない。失敗だった。

とはいえ、羊人のグラマラスな肢体は僕の好みではなかったもので、それほど落胆していない。

もつと細く、薄く、たおやかな躰が好きだ。

髪も癖のないストレート。

たとえばモデル雑誌の表紙を飾っていたあの頃の——

ガチンツ、と僕の体に何か当たる。

「おっ！」

矢だ。

返しが無い錐のような鏃。それが高速かつ正確に僕の首筋へ命中。

命中したが何も貫けない。青い皮膚は無傷。

矢は勢いのままひしゃげ、どこかへ跳ね返る。

僕は矢の方向を見詰める。

望遠レンズのようにどこまで遠くを捉えられる地球人の瞳が、町外れの鐘楼で大弓を

構える一人の兵士を発見した。

「ッー」

僕は飛び出す。地球人は宙を飛べる。砲弾よりも早く。

刹那の間に僕は鐘楼へ衝突。

ぶつかつたエネルギーによって鐘楼が丸ごと吹き飛ぶ。

その中にいた人間も爆風の衝撃波で粉微塵に。

僕は大きく息を吸った。

空気中の魔素が全身を巡る。力が溢れる。

口を開け、その力を解き放った。
熱線として。

「！」

破壊の光芒が一直線に鐘樓の基部を直撃。

すでに殆ど崩壊していた建造物を、光と熱の暴力がこれ以上ないほど破壊。灰燼に帰す。

地球人なので光線も撃てる。

鐘樓のあつた場所は灼けた更地になり、粉々の破片が町中に降り注ぐ。

「いいタイミングで腹いせさせてくれる」

僕は空中に浮かびながら街を見下ろした。

広場では相変わらず他の地球人達が原住民を弄んでいる。羊人を罵る下卑た口元。

口元しか見えない。

地球人は顔がはつきりしなかった。僕も同様だろう。

隠しているわけでもないのに、なぜか顔を認識できない。問題はなかった。

ここでは顔なんて必要ない。

誰の目も気にしなくていい。

誰のことも気にしなくていい。
誰からも咎められないのだから。

何をしてもいい世界。

ナイ・コーポレーション製転送装置のテスターに選ばれたという通知状に、そう書かれていた。

この惑星Xでは、地球人は無敵だった。

空気中に含まれる魔素を吸うことで、僕達は超人的な能力を獲得できる。

大砲さえ跳ね返す肉体。

風よりも早く動ける身体速度。

鋼鉄を握り潰せる膂力。

皮膚が青くなることと引き替えに得た数々の超能力。

槍と弓、稀に単発銃くらいしか武装がない原住民など全く脅威ではない。僕らのために用意された遊び道具、おもちゃだ。

惑星Xで僕らを脅かせるものは2つしかない。1つは同じ地球人。

もう1つは……

「っ!？」

更地となった鐘楼跡で、僕ははっと空を見上げる。

何かが降ってくる。

ひどく大きい。

とてつもない速さで。

広場に落下。

激突。轟音。

大地が異様なほど震動する。衝撃波が街の黒煙を吹き飛ばし、広場から巨大な柱状の土煙があがる。

「ンだよおおい」

ひどく不機嫌な声が、広場の上から吐き出される。

先ほどまで広場で楽しんでいた青い体の地球人だ。落下してくる何かに気付き、咄嗟に回避していた。

濛々とした土煙を見下ろしている彼らの人数は、2人。

あとの1人の位置は、土煙が晴れることで判明した。

「……出たな」

僕はそれを見て眉根を寄せる。

どろどろとしたゲル状の塊。

それが二階建ての建物さえ凌駕する大きさで、広場跡に鎮座していた。

液体と固体の中間のような半透明の肉塊に、口のような腔、眼のような点、そして無数の触腕が生えている。

その触腕に巻き付かれ、拘束され、肉塊の中に取り込まれてる地球人がいた。

例の最後の1人だ。逃げ遅れて喰われている。

肉塊に捕まった地球人はみるみるうちに体が崩壊。大量の粒子の塊になって霧散、消滅する。死んだ。

「魔獣だ」

僕は身構え、高度を上げて距離を取る。

地球人達が遊んでいた羊人はどこにも見当たらない。魔獣が落下してきたときの衝撃波で跡形もなく爆砕された。

魔獣はこの惑星で唯一僕らを殺せる存在だ。

魔獣の体内に喰われれば脱出は困難で、先ほどのように地球人だろうとすぐ死んでしまう。

僕は息を深く吸い込む。

吐く。

吐息は熱線になって魔獣へ迸る。

ぶよぶよの体に光熱が突き刺さり、不定形の肉が蒸発。ただの穴にしか見えない口が、くぐもった太鼓のような雄叫びをあげる。

他の地球人2人も攻撃を開始。

1人は口から大量の火焰を。

1人は腕から眩い稲妻を。

魔獣が吼える。

3種類の攻撃を集中され、不定形の怪物はあの太鼓に似た声で喘いだ。

焼かれて蒸気を噴き出し、炎と雷で炭化される醜い肉體。

けれどダメージが入るのは表面だけ。致命傷には遠い。

魔獣に臓器らしき部位はなかった。脳も心臓も見当たらない。ただの肉塊だ。

そのため肉體を細かくばらばらにしても、いずれ肉片同士が合体してまた復活してしまふ。

魔獣を倒すには弱点を破壊するしかない。

しかし魔獣の弱点は最初から晒されてはいないし、その弱点を露出させるまでが一苦勞だった。

なので地球人といえどひとりでは相手にしたくない。

が、今回は幸運なことに3人もいる。

僕を含めて楽しみを邪魔されて不機嫌な地球人は、遠くからでは埒があかないので距離戦に切り替える。

3方向から飛んで近付く僕らに、魔獣が応戦する。

野太い触腕がいくつも枝分かれし、先端を変形させる。

し字状に曲がった先端。

密度を上げて強力に硬質化していた。

どことなくゴルフのクラブに似ている（この惑星にゴルフがあるのかはよく知らない）けれど、僕らはゴルフボールのように固定されていない。

棒状の触腕を恐ろしい速度で振り回す魔獣。が、僕らの空中での速さはそれを超えていた。3方向に分かれているのでそれほど過密な攻撃でもない。

僕は触腕の攻撃をかいくぐり、魔獣の表面の至近距離まで肉薄する。

それまで以上に大きく深く息を吸い込む。

魔素がエネルギーに生まれ変わる。

吐く。

「ううおおおおおっ!!」

鋭く吼えながら放たれた熱線が、放射状に疾駆する。

触腕群の生える部分に命中した熱線はどろどろの肉質を弾き飛ばし、灼き、斬り裂く。

迸る煙と火花。

のたうつ不定形の肉。魔獣。くぐもった咆哮。

魔獣はなぜか触腕の殆どを切り落とされると、ああして顔を出す。

その顔さえ破壊すれば、魔獣は死ぬ。

魔獣はその不細工な顔もどきを、切り落とされた触腕群に向けている。

低く湿った嗚咽が、その顔からこぼれる。

僕らには意識を向けていない。

あとは3人全員で一斉に攻撃すれば、この魔獣を倒せる。

やはりこの人数なら楽だ。

以前不幸にも魔獣と遭遇し、かなりの時間を使ってやっと倒した。おかげで遊ぶ時間が全くなかった。最悪だった。

とにかく今回は何事もスムーズに終われる。

僕らは一斉に攻撃をする。

熱線、火炎、稲妻が魔獣の顔もどきに直撃する。

そこに、何かが割り込んだ。

「!?」

僕らはみな驚き呻く。

速い。

銃弾さえ見切る地球人の眼でも、何か恐ろしく素早いものが不意に出現したとしか分からなかった。

攻撃の余波が消え、その妨害者が姿を現す。

騎士だった。

全身を銀鼠の甲冑で完全に包み、皮膚の露出は全くない。

頭も装面付きの兜で完全に覆っている。顔が分からなかった。

左手には方形の小楯。

右手には馬上槍。

そして円形の大楯が、ひとりでに浮遊して騎士の前方を守っていた。

騎士自身も空中に浮いている。

「……だれだ？」

僕は戸惑った。

こいつはなんだ？

地球人3人の魔獣を殺せる攻撃を正面から受けて、無傷？

どうして魔獣を殺すのを妨害した？

「おい」

それらの疑問を、1人の地球人が詰問しようとし——騎士の姿が掻き消えた。

「おま」

地球人が爆ぜる。

問いかけの言葉の途中で。

胴体が消滅。

上半身と下半身が分裂、弾け飛ぶ。

その地球人のすぐそばに、騎士の姿が。

「!!」

僕らは一斉に後退して大きく距離を取った。

騎士はすかさず大楯に乗って空中を高速移動。追撃する。僕ではないもう片方へ。

地球人は全力で逃げる。

謎の騎士はなんなく追いつく。

鋭い槍が地球人の胸を貫く。

馬上槍、輪郭が霞むほど振動。

地球人、破裂。上半身の全てを失う。

ほんの数瞬で、2人の地球人が死んだ。青い肉体を粒子にして散っていく。

「おやおおっ!!」

僕は全力で空気を吸い込み、吐き出す。

先ほど魔獣の触腕を断ち切ったのと同等以上の熱線。

空中を舞う騎士に襲い掛かる。

騎士は逃げない。構える。

熱線に対して槍を刺突。

切っ先が熱線を掻き乱す。

騎士は熱線の圧力で空中に縫い止められる。

僕は熱線を放出しながら、魔素を吸い込み続けた。地球人は吐きながら吸える。

ほとんど必死になって僕は攻撃のエネルギーを高めていく。この騎士は危険だ。そして謎だ。こんなに簡単に地球人を殺せるやつがこの惑星にいるなんて。

ピピピピピピッ!!

頭の中に警告音が響く。

魔素の吸い過ぎを報せる音。

つまり地球に戻らないといけない音。

しかし僕は冷静ではなかった。

どんどん太く強くなる熱線を前に、騎士が変化を見せたからだ。

槍が変形する。

先端から円盤を生やす。

円盤の平らな面を熱線へ向ける。楯のように。

その平らな円盤から、4つの刀身が長く伸びる。

——槍の穂先に剣山をつけたような姿。

円盤、回転。

高速回転する4つのブレードが熱線を攪拌する。

騎士、熱線の中を突き進む。

高エネルギー粒子を叩き割り、あっという間に僕へ接近。

騎士が目の前に大きく。

「！！」

腹部。

4つの先端で引き千切られた。

肉体が動かさない。致命傷だ。

僕は崩壊する。

その直前、

僕を撃破した騎士が、跳ね返ったような鋭い動きで地面に突進するのを見た。

「……………」

向かう先には魔獣。

魔獣の出来損ないの顔。

騎士はそこに、猛烈な勢いで回転する4つのブレードを突き刺す。

魔獣、悲鳴。絶叫。

ぐちゃぐちゃに播^すり潰される肉塊。

そこまで見て、僕の意識も消滅。

殺された。

「……最悪」

僕は痛む頭をおさえながら、装置の寝台から降りる。

いつもの廃工場・404号室。

真四角の狭い部屋には転送装置しかない。

天蓋付き寝台と、モニター、よく分からない筐体。それらをつなげるケーブル。これだけ。

これがナイコーポレーションが用意した、異星転送装置だ。

なぜこんな簡易すぎる設備であんな体験ができるのか、僕には分からない。

そもそもこの装置のテストターと言っても通知状が一通きただけで、人間には誰にも会っていない。

通知状に書かれた廃工場のこの部屋に行ったら、本当に謎の装置があつて、書かれていた指示の通りに装置を動かして寝台で横になつたら、本当にあの惑星Xに行けた。それだけ。

あちこち調べても、ナイコーポレーションなんて会社は見つからなかった。

だいたいテスターと言われても、いつ誰にどうやって報告すればいいのか記されていない。

ひたすらに怪しかった。

しかし惑星Xで素晴らしい体験を一度してしまうと、もうそんな不審さなどどうでもよくなる。

「頭痛い…魔素の吸い過ぎだ」

僕は呻きながら、筐体に刺さった鍵を引き抜く。

銀色の鍵。

長さは10cmほど。妙に古風なデザインだった。透明な多角形の飾りが詰められている。

通知状と一緒に僕の元へ届けられた鍵だ。

この鍵を差すことで装置が起動する。

ズキズキとする頭痛に耐えながら、部屋を出る。

魔素は僕に超人的な力を与えてくれるが、吸い過ぎた状態で地球に戻ると体がおかしくなる。

だから警告音が鳴ったら帰還しないといけない。

さらに頭が痛いのは、あちらで死ぬとしばらく転送装置が使えないことだ。

どういう仕組みなのか全然分からないが、そうになっている。今晩はあの惑星へ遊びに行けない。最近は何晩ここで過ごしてたというのに。

「あーあ…」

僕は溜息を吐きながら、同じ鍵で404号室の扉を施錠する。

夢の時間は終わった。

家に帰らないと。

妹のいる家へ。

中学校を卒業してから、僕は地元のパン工場に勤めている。

地元は最悪だ。

誰もかれも妹のことを知ってるし、妹の稼いだ金で両親が豪遊してたことも知ってい

る。

妹が病気で倒れて何もかも首が回らなくなり、あちこちにその情けない姿で金の工面——自分達の遊蕩のツケ——をしたことも、みんな知っていた。

こんなところ、すぐに離れたい。

しかし妹がいる。症状はいっこうに良くなならない。

早朝。

廃工場からマンションに戻った。中に入る。

誰もいない。

正確には、一番奥の部屋に妹がいる。

両親だけいない。

リビングは2人が喧嘩して散らかったまま。

父の自慢だったゴルフのトロフィーがいくつも散乱している。

僕はそれを見ないようにして、自分の部屋を目指す。

「……兄さん？」

鈴を鳴らすような声が、可憐に、しかし弱々しく廊下に響く。
僕は振り向く。

妹の部屋。

扉の向こうで、咳き込む音が聞こえた。

「起きてたのか？」

「うん。さっき起きた」

「飯、すぐ作る。食べられる分でもいい。残りは夜食にするから」

「うん」

「出来た妹だなあ」

「え？」

「妹の食べ残しを夜食にする兄貴とか、普通に考えたら気持ち悪いだろ」

「兄さんが私のを食べてくれるのは、昔からだし。残すと怒られたし」

「僕は食いしん坊だったから」

「でも私の好きなのは分けてくれた」

「……飯、作ってくる。すぐ出かける。今晚は戻ってこれると思うから、食べたいものがあつたら作れる」

「茶碗蒸し。具のないやつ」

「ほんとそれ好きだな」

「卵のところが一番おいしい」

「分かった。じゃあ、また」

「うん」

妹の咳がさらに激しくなる。喋らせすぎた。馬鹿が、と自分を罵る。

そこから離れようとする俺に、

「兄さん」

「ん？」

「兄さんも、出来た兄貴だよ」

「……」

違う、と言いつうになる自分を必死で抑える。

頭痛が加速する。

僕は歯を食いしばってそれに耐え、

「……ありがとう」

なんとか絞り出すと、逃げるように自分の部屋へ駆け込んだ。
ベッドに体を投げ、息を荒げる。

枕元にはモデル雑誌。

細く、薄く、たおやかな肢体が晒された表紙。

癖のないストレートの髪。

清楚な風貌。

それを裏切る、劣情を煽るほど白い肌。柔らかな曲線。

昔の妹。

僕の妹。

第2話：走れ！ パン切りくん

パン工場。

作業エリアに向かう廊下。

「よお」

どすん、と背中を強く押される。ぶたれる、に近い。

その嘲弄の声音に僕は振り返った。

先輩の工員だった。

「お前の妹の載ってるやつ、こないだ見つけちゃまってよ。かなり良かったから感想伝えようと思ってな」

にやにやと下品な薄ら笑い。

工員は表情を思い切り歪めて笑い、見下す。

「すつげえエロいなお前んとこの妹ちゃん！」

「……」

僕は拳を握る。

工員が好色に嗤う。

「あんなやらしいカラダされたらたまんねえよなあ。昨日の夜なんて思わずそれ使つてひとりでヤつちまったよ」

くへっ、と奇声を上げて腹を抱える工員。

その彼に、僕は何も言わず全力で殴り付けた。が、拳は虚しく空を切る。

躲された。

逆に相手の拳が僕の顔を殴り飛ばす。

転倒する僕に工員は蹴り込み、唾を吐き捨てる。

「今度会わせろよ。いい絵撮つてくれるとこ紹介してやつからさ」

言つて、さらにもう一度蹴りつける。

満足そうに笑いながら、工員は作業エリアに向かつていく。

「……しね」

僕はすぐに起き上がれなかった。

痛みのせいではない。

拳を強く握りしめる。

痛いほど。

震えるほど。

ベルトコンベアを。パンの塊が流れてくる。

僕はそれをパン切り包丁でスライスする。

「……」

包丁は刃渡り30cm。いい切れ味とは言えない。スライスする機械を導入する気が工場にはないらしい。資金繰りがだいぶまずいと噂されている。

「……」

僕はパンを切る。

コンベアの上のパンを切る装置。

「……」

僕はパンを切る。

パン切り包丁のための僕。

パンを切る。

僕は包丁でパンを切る。

僕は包丁で原住民を斬る。

包丁は刃渡り100cm。いい切れ味だ。僕が生み出した。地球人なので武器も作れる。

その包丁で、腕から翼が生えた原住民を切り払う。

「&~%\$~*+%&*!!」

僕が鳥人と呼んでいる原住民が、解読不能な悲鳴を上げて逃げ惑う。無駄だ。地球人からは逃げられない。

逃げる鳥人の背中を叩き斬る。血飛沫。羽毛が舞う。

僕は目に映る鳥人全てに飛びかかって切り捨てていく。

「~~~~~♪」

包丁は思ったより良い出来映えだった。

2日ぶりの転送。

昂揚した僕は鼻歌交じりに集落の原住民を皆殺しにしていく。

それでも逃げようとする鳥人は熱線で焼き払う。
久しぶりなので今日は全員殺すことにしていた。

「……………」

全員殺した。

夥しい死体に満ちた集落の血生臭さ。

それに満足した僕は、飛翔して次の場所を探す。

空を飛ぶ。

遠くに、柱状の大きな雲が立っている。

大地に突き刺さった雲霧の柱。

霧の塔だ。

あの塔の中から、僕らは転送されてやってきた。

この惑星の地図を僕は持っていないので、いつも霧の塔を目安に遊んでいる。
霧の塔の近くには原住民も集落を作らない。真っ先に地球人に狙われるからだ。
だから出来るだけ塔から離れた場所に行つて、遊び先を見繕う。

今回も僕はそうして塔の反対方向へ飛んでいく。

「お」

途中で原住民の移民集団を発見。家畜——牛と羊の中間のような生物——に移動式の住居と大荷物を運ばせていた鼠人。

熱線で焼き殺す。

跡形もなく焼け死んだのを確認してさらに飛ぶ。

この惑星は民族移動が激しいのか、ああして放浪している原住民達によく出くわす。

原住民の人口に対して、土地が広すぎるせいだろう。

実際この惑星はかなり広い。

僕はまだこの星の隅々まで探検したことがなかった。

霧の塔は惑星に複数設置されていたし、そもそも地図がないのでどこがなんだか分からない。

遊ぶところには困らないので、大きな問題もないのだけけれど。

「……あつた」

そうこうしているうちに、新しい集落を地平線の先に見つける。

が、最大望遠で捉えた原住民の姿に、僕は思わず舌打ちをした。

「犬かあ」

その集落の住民は、犬のような耳と尻尾、爪先を持った犬人だった。苛立たしい。

僕はその集落を飛び越え、別の場所を探す。

かなりの距離を飛んだ。

残り時間が心配になった頃、やっとそれなりの村を発見。

住民を確認する。馬人だ。小ぶりな耳と尻尾、足先に蹄。

僕は安堵して、彼らの村の一軒に落下した。

自由落下ではなく力を込めて衝突。

民家は爆発。粉々に破壊される。

馬人が悲鳴を上げて走り出す中、僕は再び上昇。また落下。

別の家に突き刺さり爆砕する。

また上昇。落下。破壊。繰り返す。

色々と溜め込んだときは、単純に壊して回るのが一番だ。

「これで全部か」

僕は全ての家屋を粉碎したことを確認し、周囲に熱線を何発か乱射した。馬人は逃げ足が速い。

もちろん地球人なら簡単に追いつけるが、それは先ほど鳥人の集落でやった作った包丁もまだ手元にあったが、出番がなさそうなので手で潰して捨てる。地球人の視力は馬人を見逃さない。

熱線で彼らをひとりずつ焼き殺す遊びに興じようとした。
が、

「っ!!」

僕は身を翻してそちらに振り向く。
視た。

遠く遠く、先ほど通り過ぎた犬人の集落。

その上空で、僕とは別の地球人が戦っている。

青い体をした、顔のない地球人が。

——あの騎士と。

地球人は身の丈を超す大槌を振り回す。

騎士が大槌で受け止めた。

防御と同時に槍を突き出す騎士。

地球人は瞬時に後退。それを躲す。

騎士が追撃。

大槌に乗ってジグザグに飛翔しながら地球人へ迫る。

地球人、雄叫びを上げる。

「!!」

大気が激しく震動する。

騎士の突進が弾き飛ばされた。

地球人はすかさず深く吸い込み、超震動波を放出。

騎士、大槌を構えて防御。小刻みに震える。空中から動けない。

地球人、大槌に超震動の力を与える。高音。大槌の輪郭がぼやける。動けない騎士へ

突撃して大槌を叩き込んだ。

地球人の腕力と超震動の合成破壊力が騎士を襲う。

騎士が楯の上から吹き飛ばされ、地面に高速落下。

落ちる先には犬人の民家が。

騎士は民家に衝突する前に空中で停止する。

地球人が再び魔素を深く吸い込む。超震動ビームを放とうとしていた。

騎士、原住民の民家を一瞥。

そして構えていた大楯の上に乗れり、身を低く沈めて構える。

馬上槍の切っ先を地球人に向けた。

「……………避けない?」

僕は訝しむ。戦闘が続く。

地球人、超震動波を放出。

騎士、突進。

槍の輪郭がぼやける。高音をばらまきながら。

超震動波と槍がぶつかる。

その瞬間、互いに放っていた高音が消滅。

ぼやけていた槍の輪郭も元に戻る。

その鋭い槍が超震動の波濤を突き破る。
地球人の口に刺さり頭を貫通。

深々と根元まで刺し込む。

槍、再び高音と震動。

地球人の頭が冗談のように弾け、消失する。
首を無くした青い体が、粒子になって散っていく。

騎士の勝利だ。

「

……遠吠えが響く。

集落から姿を現した犬人たちが、空に向かって一斉に吼え立てていた。

中には騎士に向かって諸手をあげる者もいる。

明らかな賛辞と祝福の様相。

騎士はそれに対して槍を掲げて応え、どこかに飛んで消えていった。

僕はその様子をずっと見ていた。

「なんだあれ」

騎士は原住民を守っている。

原住民を脅かす地球人を斃している。

単独では地球人でさえ敵わない。

地球人を殺す騎士。

「……地球人殺し」

この日から、僕は地球人殺しを倒す使命に駆られ始めた。

あれがいる限り、今までのように自由に過ごすことは出来ない。

あれさえいなければ、僕はどこにでも行ける。なんだって出来る。

僕は自由になれる。

あれさえいなければ。

第3話：犬の騎士

仕事の帰り、妹の元マナージャーと出会った。

「近くまで来たものだから」

「どちら様ですか」

缶ジュースを飲みながら、僕は彼に吐き捨てる。
通りを外れた暗い脇道。

街灯に照らされる自動販売機の前に僕らはいた。

マナージャーは苦笑し、

「あの子は……元気じゃないよね」

「さあね」

僕は元マナージャーを見る。

ひどくやつれた顔。かさついた肌。生気がない。

生きながら死んでるかのような男。

「あの頃はさ、楽しかったね」

「そっちはそうだろうよ」

「またあの頃みたいにならないかな、っていつも思ってる」

「……」

ジューズを一口飲む。

妹のいた事務所は、妹が辞めたあと一気に経営が傾いていったらしい。上層部の人間はいくつか失踪し、良い話は何ひとつない。

この元マネージャーがそのときどういう経緯を味わったかは、今の姿でなんとなく察する。

僕は侮蔑の視線を投げつけた。

マネージャーは意に介せず、

「君は？ あの頃より今の方がマシ？」

「……」

「知ってるよ。ご両親はまともに稼げてないし、君は高校に行けなくなった。あの子の面倒があるから給料の安い地元の仕事しかできない」

僕は缶の中身を放った。

男の顔とスーツにジューズがかかる。彼は喋るのをやめる。

「二度と僕らの前に現れるな」

「……分かるんだ」

マネージャーが言う。

声音が若干変化していた。

僕を見るその眼差しも。

「君は同じだ。見てれば分かる」

「何が」

「あの子を見る目」

僕は缶を投げつけた。

マネージャーの頭に当たる。

彼は憐れんだ瞳で僕を眺め、そして背を向けて去っていった。

「……兄さん？」

廊下に置かれた空の食器を見下ろしていた僕に、扉の向こうから妹が呼びかける。

「なにかあった？」

「……なんでもない。この間、道を歩いてたら犬を見つけた。それを思い出してた」

「犬」

妹の声が弾む。

「どんな犬？」

「柴犬系の、たぶん雑種。耳は垂れてなくて、ピンとした。尻尾もふさふさで丸くて長め。犬って感じの犬」

「そっかあ」

ふふ、と妹が笑う。

「イヌイヌランド思い出すね。憶えてる？」

「そりやな。僕が連れてったんだから」

「かわいかったよね。あんなに犬に囲まれたのはじめてだったから、すごかった」
「飼えれば良かったんだけどな」

「仕方ないよ」

父は犬アレルギーで、母は猫アレルギーだった。

ふたりは動物が嫌いだ。

「そういえば最近、モールに犬カフェが出来たらしい」

「モール？ ショッピングモール？ あつちの大きい方の？」

「大きい方の。猫じゃなくて犬って珍しいし、けっこう評判いいらしい」

「いいなあいいなあ」

妹は綻ぶようにはしゃぐ。

扉越しとはいえ、妹のそんな声を聞いたのはいつぶりだろう。

「イヌイヌランドって言えば、私、兄さんのことよく憶えてる」

「僕は誰かさんにせがまれて写真撮ってた覚えしかない」

「とても人懐っこくて、テンションもすごい高いハスキーがいたの。で、私その子と目線合わせようとしてかがんじゃった。そしたらその子すごい勢いで私に飛びかかっ

ちゃって」

「……ああ、思い出した。犬に仰向けにされたやつだ」

「そうそれ。私びっくりしてパニックになっちゃって。兄さんめちやくちや怒っちゃやし、ランドの人もすごい謝ってて」

「仕方ないだろ。こっちからしたら人の妹が犬に襲われてるようにしか見えなかったんだし」

実際はそのハスキーは妹の顔が無邪気に鼻で嗅いだり舌で舐めたりしただけだった。それだけだというのに。

「でも、あんなに怒った兄さん見たのはじめてだったから」

「……」

あのととき、駆け寄った僕が見たのは。

——小さな悲鳴。苦鳴。凍り付いた顔。狭まった瞳孔。小刻みに震える体。

例のハスキー犬が心配げに吼えて呼びかけ、我に返るまで、浅く速い呼吸を繰り返し

ていた妹。

僕に気付き、必死に腕へしがみついた妹。

「私が全部悪いのにな」

「何が」

「あの子は全然悪くなかったし、ランドの人達だつてあんなに謝ることじゃなかったし、兄さんをあんなに怒らせるほどのことじゃなかったよ」

妹は笑う。

先ほどの弾んだ声とは似ても似つかない声で。

「犬にじゃれつかれたくらいで大袈裟な声出した私が悪かったの」

妹が言う。

「私が、悪かったの」

「違う」

僕は言った。

「悪かったのは僕だ。いきなりなことだから頭に血が上りすぎてた。ランドに文句を言
いまくったのも僕だ。悪いのは僕だ。当の被害者が悪いわけではない。つまり」

僕は言葉を詰まらせ、頭を必死で回し、扉の向こうへ伝えた。

「お前は何も悪くない」

そう言うのと、妹はけっこうな間を置いてから、小さくそつと応えた。

「……ありがと、兄さん」

*** **

地球人殺し——あの騎士のこと——を観察する。

僕はある田舎の農家の二階から、ベッドで俯せになって地球人殺しを見ていた。

透視と望遠を駆使し、見つからないように。

滞在時間を長くするため、出来るだけベッドの上で過ごす。

ちなみにベッドに俯せになった僕の下で、さらに俯せに組み伏された原住民がいた。

兎人の女。兎の耳と丸い尻尾が生えている。

この農家の住人で、唯一生かしておいた。兎人の女は一度ベッドでことを始めると抵

抗なく続けるので話が早い。

なおベッド脇には他の兎人の死体が重なっている。外に放置して騒ぎになると面倒だった。

それはともかく。

観察の結果、地球人殺しは犬人の地域で主に活動していた。

犬人を襲う地球人を退治し、時々他の原住民の種族も助けに行く（最初に僕が襲われたのもこのパターン）。

魔獣が出てもやはり退治する。

地球人さえ手こずる魔獣が相手でも、地球人殺しは圧倒的だった。

その他、地球人や魔獣が出ないときでも、地球人殺しは犬人のために働いた。

森を切り拓いて畑にし、

氾濫する川があればその川の形を変えたり、堤防を作ったり家を作ったり道を作ったり。

犬人たちは地球人殺しを讃えた。

犬人だけでなく、羊人も馬人も鳥人も。

まるで原住民の守護者のように。

「……………」

僕は下に敷いた兎人の女の首をおもむろに絞め、腰を強く打ち付ける。

原住民は苦しきから逃げようと藻掻く。無駄。首の骨を折った。そのまま握り潰す。長い耳で弧を描いて頭が床に落下。

首なし原住民に僕は変わらず腰をぶつけ続ける。

気に入らなかった。

その後も幾日か観察を続けた。

犬人の勢力圏はどんどん大きくなり、他の種族もその傘下に収めていった。

結果、地球人と衝突することが増えていった。

地球人の遊び場を地球人殺しが奪う形。

この図式に僕以外の地球人も気付いたらしく、何人かでまとまって犬人の国を襲うことが多くなった。

地球人殺しは戦った。

ときに原住民を救い、

ときに救えず、

村や町を守り、
守りきれず焼き払われ、

それでも地球人殺しは襲い掛かる地球人と戦い続けた。

僕はそれを見ていた。

幸い、地球人殺しがいる犬人の地域に近付かなければ、地球人殺しは地球人との戦いで忙しいので狙われることはない。

この惑星はかなり広いので、犬人が領域を拡大したといってもたいした影響はなかった。

なので一番無駄なく楽しむ方法は、地球人殺しとは無関係の場所で遊ぶことだ。
だというのに。

僕は何故か離れようとしなかった。

例の農家で監視し続けた。原住民の女を拉致しつつ。

僕は見続けた。

地球人殺しの戦いを。

*
*
*

*
*
*

*
*
*

そして地球人殺しは、その魔獣と戦う日を迎えた。

地球人殺しは見上げた。
僕も見た。

その魔獣が触腕で形作ったものを。

巨大な鏡。

そこに浮かび上がった映像。

ベッドの上。

人間の男が押し倒している。

男は背中しか映らず、顔が見えない。

しかし男に押し倒されている者は見えた。

地球人殺しは見た。

僕も見た。

見てしまった。

細く、薄く、たおやかな肢体。

癖のないストレートの髪。

凍り付いた清楚な美貌。

淫りがわしいほど白い肌。

揉みしだかれる柔らかな曲線。

昔の妹。

僕の、妹。

第4話：やわはだをふるわせまさぐる者共。鬼。けもの

昔、妹を迎えに行つたときがあつた。

「兄さん？」

夜、撮影スタジオのロビーで待つていた僕を見つけると、妹は驚きの顔を見せる。

僕は手を振り、

「父さんは急用が出来たから、代わりの迎え」

「そっか」

妹は苦笑する。

寂しい笑い方だった。急用と僕が濁した言い方に気付いている。

僕は手にしていた自分のではないコートを、妹に渡す。

「車じゃないから、電車で帰ろう。これ着た方がいい。けっこう寒い」

「持つてきてくれたの？」

妹は表情を緩める。

僕らが以前デパートに行ったとき、兄妹そろって一目惚れしたコートだ。

男女どっちが着ても様になる不思議なデザイン。

あのとき、お互い顔を見合わせて「欲しい?」と声を揃えたのをよく憶えている。ふたりで笑い合った。

結局僕が買って贈った。

そんなコートを、妹は愛おしそうに羽織る。

まるで親鳥にくるまれる雛のように。

僕は先導してロビーから抜ける。

車道側を歩きながら妹と話した。

「着たくないなら僕が着るつもりだった」

「兄さんが着ると大きすぎちようど良いもんね」

妹はおかしそうに微笑む。

実際、妹の華奢な体にはそのコートは大きすぎた。

袖口が長いので指先以外隠れているし、折れそうに細い腰に対してコートのウエストが広すぎる。

無理して大人の服を纏っているような、危ういアンバランスさが彼女にはあった。

その不安定さがみんなの目を集めることを、僕は知っていた。

広い襟元の白い鎖骨から目を背けつつ、

「妹のコートを着たことある兄貴って、字面だけだと相当やばいよな」

妹に贈ったが、未練がましく一度だけ着させて欲しいと頭を下げたことがある。

妹はあつさり快諾し、それ以来、着たいときは誰でも着て良いことになったコート。

僕はそれ以来一度も着ていないが。

「そう？ このコートは家族共用みたいなものだから、私は別になんとも思わないけど」

「このときも、妹はさらつとした口調で首を傾げる。

「兄っていう生き物は、いつ妹に気持ち悪がられるか日々怖がってるものなんだよ」

「……私が？ 兄さんを？」

「そういうのは自分じゃ分かんないから、いやだと思ったたらすぐ言っただけで欲しいって意味。

出来るだけ直したい」

震える心を隠しながら、僕はまるで何の気もないかのように言う。

直したいのは本当だった。

「僕には我慢しなくていい」

「……」

妹は真剣な顔で考え、重々しく口を開く。

「実は、ある」

「……マジ?」

「夜にお腹空いたからって、台所でおいしそうな作るでしょ。ダイエット中なのにあれの匂い本当においしそうだから拷問なの」

「なんで知ってる?」

「どれのこと?」

「僕が夜にひとり豚バラの照り焼き作ってたこと」

「兄さんが隠せてると思ってたことが驚きだよ」

妹は心の底からおかしそうに笑った。

いつも小さい笑い方をするから、今みたいな開けつびろげな表情は珍しかった。

僕らは駅前のロータリーまで辿り着く。

夜風が吹く。

冷たい空気。

だけど隣には妹がいる。

「……ねえ兄さん」

「ん」

「欲しいものとか、ない」

「なんだよ急に」

「いいから」

「一番欲しいものは手に入らない。」

「なので僕は少し考える。」

「休みが欲しい」

「学校の？」

「お前の」

「っ」

「妹が息を呑む。」

「僕は顔を見ず、

「この間ニュースでやってたろ、イヌイヌランド。犬が大量にいるやつ」

「言い方」

「飼えないから一回くらい行ってもいいと思って」

「行きたいなあ」

「忙しそうだ」

最近はなかなか家にも帰ってこなかった。

「……うん」

妹は俯く。

「でもね、お父さんもお母さんも、買いたいものあるって言ってたから。頑張るよ」

「……」

「みんな喜ぶなら、私は頑張れる」

妹は顔をあげる。

僕を見る。

微笑んで。

「兄さんが欲しいものあったら、私はそのために頑張るよ」

「僕は……」

そのとき、妹の携帯電話が鳴る。

びくつ、と妹が肩を震わす。

血の気の引いた顔で、妹はバッグから携帯電話をおそるおそる取り出す。

「はい……はい……」

一方的な通話。妹は頷くだけ。

そして話が終わる。

妹は硬い顔で僕を見て、

「ごめん、急に仕事が決まって、今から打ち合わせしないといけなくなっちゃったって

……」

「今から？」

「帰りはマネージャーさんが送ってくれるから」

妹はちらつとロータリーを見やる。

僕もそちらを振り向く。

ロータリーに一台の車。

運転席にいるのは、妹のマネージャーだ。

「ごめんね、せつかく来てくれたのに」

「それはどうでもいい」

「怒らないで」

「怒ってない」

「お休みもらえるよう、頼んでみるから。埋め合わせってことで。そしたら、一緒に行こ、イヌイヌランド」

妹は微笑み、僕の頬を撫でた。

滑らかで冷たい纖手。

ひとの血を熱くしてしまう香り。

汚したくなるほど白い雪の肌。

「じゃあ」

妹は僕から離れる。笑いながら。

あのマネージャーの車に。

僕はそれを見送った。

妹が帰ってきたのは、次の日の朝だった。
打ち合わせが長引いたのでホテルに泊まったと言った妹。
そのあと部屋に一日中閉じこもった妹。

このときの埋め合わせとして、妹は休みをもらった。
僕らは約束通り、イヌイヌランドに行った。

*** **

その魔獣は空から降ってきた。

落下の衝撃波で大人の街の1/3を破壊した魔獣は、伸びる多数の触腕で原住民を捕食していった。

魔獣の体型は芋虫のような筒型だ。

体高は2階建ての建物を超え、全長は高さの3倍。

特徴は、触腕の数が非常に多いことだ。背中ではびっしりとイソギンチャクのように繋がっている。

魔獣は街をゆっくり這いずっていった。

ゲル状の体を伸び縮みさせ、建物を取り込んで消化。

その無数の触腕で避難する原住民を存分に取り込み、肉と骨をぐずぐずに溶かして食べていく。

僕はその光景を、農家の二階から眺めていた。

魔獣が落下し、地球人殺しが現場に到着するまでの12秒間で、街の住民の8割が喰い殺された。

タイミングが悪かった。

地球人殺しは別の羊人の街で3人の地球人と戦っている最中で、そちらを片付けるのに10秒を要してしまった。

地球人殺し、体長さの何倍もの触腕を展開する魔獣に相対する。

魔獣が、ふと動きを止める。

魔獣の触腕に変化が生じる。

背中に生えた触腕群のうち、頭——頭部はないのでつまり進行方向——に近い1/3が黒く変色する。

どろどろの半液体めいたものから、シリコーンゴムのような柔らかい固体に。

その黒い触腕が、地球人殺しに殺到した。

無数の黒い鞭の嵐。

地球人殺しは正面から突き破る。

正面から迫る鞭を馬上槍で貫き、横からの攻撃を左手の小楯で弾く。

残りの触腕の殴打を足場にした大楯が機敏な機動で回避。

その黒い触腕の全てを瞬く間に破壊し尽くす。

「~~~~~」

魔獣、さらに変化。

胴体部分の触腕群、原形質めいたそれが様々な形状に変形していく。

うち一本が地球人殺しに迫る。

先端からワイヤーが伸び、カプセルのような長球体と繋がっている。

その長球体が音を立てて震動しながら、地球人殺しに叩き付けられた。

遅い。

僕でも殴り返せる。

当然、地球人殺しはあっさり長球体を槍で破壊。それと繋がっていた触腕も続けざまに刺し貫く。

が、そこで異変が起きた。

「……っ」

地球人殺し、僅かに身震い。その動きが鈍る。

魔獣は次の触腕を繰り出す。

先端がお腕のようなカップ状になっている触腕だ。

カップの底には細かいブラシ状の触手が高密度に生え、それが不規則かつ高速で回転している。

この触腕は二股に枝分かれしており、その先端にそれぞれ例のカップ状の部位を形成していた。

底に回転ブラシを持つカップが2つ。

それが地球人殺しに近付いていく。

「！」

地球人殺しは大楯を正面に構える。

カップのうち1つが楯を包んだ。

カップはゴムのように柔らかい。大楯にフィットし、奥のブラシの複雑な震動を楯に与える。低い回転音。

地球人殺し、耐える。

……おかしい。

僕は訝しむ。

地球人殺しは、なぜかその場から動かない。

大楯はひとりでに宙を浮いていた。そのため持ち主は自由に動ける。

だというのに、地球人殺しは大楯の後ろに隠れていた。

その地球人殺しの頭上から、もう片方のカップもどきが迫る。

地球人殺しは反応。

左腕の方形の楯で受け止める。

カップ、小楯をやはり包み込み、ブラシの高速振動を騎士本人に浴びせた。

地球人殺しの体が、跳ねる。

これもおかしい。

カップ状の触手は不気味ではあるが、それほど力があるようには見えない。

臂力においては地球人すら凌駕する地球人殺しが、明らかに苦戦している。

「……………」

地球人殺し、震える体で右腕の馬上槍を振るった。

高周波音を撒き散らし、槍の輪郭がぼやける。

その刀身は左腕を包むカップの触腕に叩き込まれ、一瞬で敵手を爆砕させる。

大楯を震わせているもうひとつのカップにもそのまま攻撃。

ようやく触腕を破壊する。

「何してんだ……………」

僕はそれを眺め、思わず口に出した。

僕の熱線を掻き分けられる地球人殺しが、あんな触手ひとつに手こずっている。

そのことが、どういうわけが非常に気に入らなかった。

魔獣は休むことなく攻撃を続行。

魔獣、吼える。

フルートを思わせる音。気の滅入る音色。

その音を響かせながら、さらに別の触腕を次々と繰り出していく。

太い先端が首を振ってうねる触腕。

先が二股や三股に細く分かれている触腕。

先端の球状部分のみ激しく震動する触腕。

細かい触手を無数に伸ばす触腕。

球形の粒がいくつも数珠つなぎになった触腕。

多量の粘液を垂れ流すだけの触腕。

縄状の触腕。

手枷型の触腕。

等々……。

禍々しい形状の触腕群を前にして、地球人殺しはやはり動けずにいた。

否。

震えている。

力なく。

あの地球人殺しが。

クリップ状の触腕達に吊し上げられたまま。

異形の触腕群が騎士を呑み込む。

甲冑の隙間へ潜り込む触腕。

地球人殺しがびくんと跳ねて揺れる。

楯も鎧も機能していない。

槍と大楯が、浮力を失って地面に落ちる。

粘液が浴びせられ、さらに多くの触手が潜り込んだ。

異様な光景だった。

騎士が夥しい数の触手に陵辱されている。

「……！」

僕は農家から飛び出ようとした。

しかし思いとどまる。

——なんで今、あいつを助けようと思った？

このままなら地球人殺しは魔獣に倒される。

あの魔獣は特別強そうでもない。

なので僕なら殺せる。

地球人殺しのいない原住民も同様。

つまりこのまま眺めているのが一番得策だった。

なのに。

逡巡する。

これでいいのか迷う気持ち。

なぜ？

僕の迷いなど知らない戦闘に、変化が起きる。

「……なんだ？」

変化を見せたのは、魔獣の尻尾の触腕群だ。

多数の触腕がひとつに融合し、幅広の新しい部位を形成していく。

それは一枚の鏡だった。

薄さはともかく、その大きさは魔獣本体に匹敵する。

磨き上げられた表面が、触手に弄ばれる騎士を映し出す。

その鏡像が、激しく乱れる。

砂嵐。

明滅。

そして安定。

映る。

地球人殺しが、ではない。

部屋だ。

明らかに地球の調度品。

画面中央に大きなベッド。

そのベッドの上で。

人間の男が誰かを押し倒している。

男は背中しか映らず、顔が見えない。

しかし男に押し倒されている者は見えた。

地球人殺しは見た。

僕も見た。

見てしまった。

衣服が乱雑にはだけられ、

露わになった淫靡なほど白く柔らかな部分を揉みし抱かれている少女。

清楚な美貌を恐怖で凍り付かせ、

しなやかな髪を震わしている、

僕の、妹が。

「……………なんで」

画像が切り替わる。

妹が見たことのない男に手を引かれている。

父と同じかそれ以上の年齢。

見るからに裕福な身なり。

妹の腰を引いて密着しながら、高級ホテルに入っていく。

画像が切り替わる。

やはり男に連れられていく妹。

先ほどとは違う男。

その顔は、僕も知っている人間だった。

妹の事務所の、社長。

人気のない場所のホテルへ、妹の体をべたべた撫でながら入っていく。

「やめろ」

画像が切り替わる。

真夜中の駐車場。

一台の車。

揺れている。

フロントガラスに一瞬だけ顔が浮かぶ。
妹の顔。

画像が切り替わる。

夜の公園。

画像が切り替わる。

風呂場。

画像が切り替わる。

画像が切り替わる。

画像が切り替わる。

画像が切り替わる。

画像が切り替わる。

画像が切り替わる。

……最後に映し出されたのは。

妹。

妹の顔のアップ。

光のない瞳。

作り物のような表情。

半開きにした朱唇と、そこから垂れる唾液。

その唾液を舐め取る、誰かの舌。

「
!!
」

僕は飛翔した。

先ほど逡巡した自分を憎みながら。

上昇の衝撃で農家が爆発し吹き飛ぶ。

僕は全身全霊を込めて空気を吸い込む。

ピピピピピピピピピピピピ!!

あつという間に警告音が鳴る。

関係ない。

僕の全身が青く灯る。青い火花、帯電。

上空から最大望遠でそれを睨む。

吐き出す。

青い熱線。

いつもの熱線とは比べものにならないほどのエネルギー密度。

大気を焼き焦がし、熱波が大地を払い飛ばす。

極太の青い光芒は遙か先の犬人の街まで一瞬で到達。

突き刺さる。

魔獣の背中にできた鏡に。

妹の姿ごと。

地球人殺しが全身を震動させる。

それまでのような怯えの震えではない。

槍に与えていたのと同様の高周波の震動だ。

甲冑の全てから超震動が放たれる。

地球人殺しを陵辱していた触腕、その全てが跡形もなく消し飛ぶ。

魔獣、フルートに似た音で悲鳴を上げる。

地球人殺し、手を横に翳す。

馬上槍と大楯が地面から浮上。主の手元に舞い戻る。

地球人殺しは大楯の上に乗る、馬上槍をまつすぐ前に構える。

魔獣は一部に残った最後の触手群を使って騎士を叩き落とそうと足掻いた。

地球人殺しの槍、切っ先が変形。

4つの長い刀身が剣山のように生えた円盤を顕す。

円盤、残像も残らないほどの高速で回転。高周波を撒き散らす。

騎士が突進する。

いくつもの触腕が襲い掛かった。

無意味。無力。

槍の先端に触れるだけで消滅する。

一瞬で全ての触腕がこの惑星から掻き消えた。

魔獣が絶叫する。

騎士、魔獣の体に背中から襲い掛かる。

ゲル状の体に高速回転ブレードを激しく突き刺した。

「~~~~~!!!!!!」

魔獣の体が瞬く間に攪拌され、引き千切られていく。

弱点の顔が出るのを待つか一切関係ない。

暴力で蹂躪する。

一方的に。

魔獣の肉体は次々と削り取られ、ついに前と後ろに引き裂かれた。

地球人殺しはそのまま頭へ槍を向ける。

魔獣の下半身が独自にうねって反撃しようとする。

「失せろ」

僕は再び熱線。青い熱線。

魔獣の下半身を呑み込む。下半身、全て弾け飛ぶ。

地球人殺し、上半身を貫通。

魔獣を無数の欠片に攪拌した。

「~~~~~:~~~~~、~~~~~:~~~~~」

魔獣、地面に落ちた比較的大きな欠片から呻く。
そこに、顔があつた。

3つの穴。

蠢く口と目。

騎士はその肉片を見つけ、踏み付ける。

「……」

そして回転をやめた槍の切っ先で、突く。

魔獣、悲鳴。

突き刺す。

悲鳴。

突き刺す。

悲鳴。

悲鳴。

突き刺す。

突き刺す。
突き刺す。
突き刺す。
突き刺す。
突き刺す。
突き刺す。
突き刺す。
突き刺す。

……どれくらい、騎士はそうしていただろう。

魔獣はとつくにただの物質になっている。死んでいた。

地球人殺しもようやく我に返ったのか、刺突の動きをやめる。

「……………」

地球人殺し、地面に膝をつく。
俯く。

肩を震わせていた。

ずっと。

ずっと。

—

僕はそれを見ていた。

地球人殺しはかなりの力を消費している。

対して安全を無視した僕の力はかつてないほど高まっていた。

今なら倒せるかもしれない。

だというのに、僕はただ見ていた。

目が離せなかった。

惑星の風が目になっていた。

次の日。
元マネージャーが変死体で発見された。

第5話：破却

ゲボツ、グボ、と僕は床に嘔吐する。

404号室の床に吐瀉物がぶちまけられた。異臭。喉の奥が熱く気持ち悪い。頭痛が鈍く響く。

吐き戻したもののの中に、赤い液体がかなり混じっている。血だ。目眩がする。

「くそが」

僕は神経が鈍くなった体に鞭打ち、なんとか家路へつく。

魔素を吸い過ぎた。まだ体に残っている。

惑星Xで吸った魔素は、地球の空気を吸うことで浄化される。

多くの魔素を浄化するにはそれだけ時間が掛かる。

浄化しきれずまた惑星Xで魔素を吸えば、どんどん体を壊していく。

酒や煙草と同じだった。

快感という意味では麻薬に近い。

誘惑に駆られる。

「……戻らないと」

僕は帰る。

妹がいるから。

*** **

『今朝、〇〇区のマンションで男性の変死体が発見されました』

居間のテレビが告げたニュースに、僕は顔を向ける。

そして、妹の食事を作っていた手を思わず止めた。

『男性は発見時すでに息がなく、自身のものと思われる大量の出血が床一面に広がっていたそうです。外傷は見当たらず、また男性は一人暮らしでした。男性は芸能事務所に

所属していることが分かっています』

顔写真が映る。

僕の知っている男。

『男性は発見されたとき、手に何か黒い紙を握っていたという情報も入っていますが、詳しいことはまだ分かっていません』

『男性の勤め先の事務所は社長含めた上層部及び取引先の関係者が次々と失踪しており、今回の事件と関係しているのか、警察は捜査を続けています』

妹の元マネージャー。

「……」

僕は調理を再開する。

「起きてるか？」

僕は扉越しに妹へ呼びかける。

朝食が載ったトレイを廊下に置き、食卓カバーで覆う。

返事はない。

扉を手でなぞった。

少しだけ目を瞑り、

僕は言う。

「……あと少し稼いだら、ここを出よう。一緒に」

返事はない。

しかし妹の気配は分かった。

だから続けた。

「誰も僕らを知らないところに引越して、そこで今よりもっと稼ぐ。いい医者だつて見つけるし、学校にも行ける。お前は頭いいからどこにだつて入れる」

そして僕は息を吸う。

地球の空気を。

妹へ言う。

「ここから出れば、なんだつて出来る」

返事はなかった。

構わなかった。

僕はその場を離れ、自分の部屋に向かう。

僕の部屋の机には、一段だけ強固に鍵を掛けられた引き出しがある。備え付けられた鍵だけでなく、南京錠とダイヤルロックも付けた引き出し。

その引き出しに、僕の稼ぎの全てが現金で入っている。

妹の稼いだ金を当然のように自分達で使う両親への対策だった。ものすごく不便だが、そもそも工場の給料は現金で渡される。

……両親と言えば、ここのところ2人の姿を見ていない。

最後に見たのはいつだったか振り返り、僕は眉根を寄せる。

「地球人殺しに殺された日か」

あの日の夕方、2人は居間の調度品を全て倒して壊すほどの大喧嘩を繰り広げた。そして2人とも家を出てどこかに行った。

僕はひどくうんざりして転送装置に行った（そして地球人殺しに殺された）。

みんなで、妹を置いて。

「……稼がないとな」

僕は机の上、小さな置き鏡に言った。
鏡像の自分が頷く。
出かける。

工場の正門に人だかりが出来ている。
どれも見慣れた工員達だ。なぜか中に入らない。

「？」

僕は訝しみ、近づく。

正門が開いていない。

門に何かの張り紙があった。

誰かが叫ぶ。

「――夜逃げだよクソツタレ！ 社長も工場長もみんないなくなりやがった！」

「つぎけんな給料日前だぞ!?!」

がなり、ざわめき、怒鳴る。

僕は呆然とした。

夜逃げ？ 給料は？ 無職？

突然のことに頭が追いつかない。

不意に、僕のポケットで携帯電話が鳴った。

「……………」

見る知らない番号だ。

出る。

相手は名乗った。

「……………警察?」

電話口の向こうで説明がなされる。

その内容は、混乱する僕の頭を容赦なく殴打した。

「父さんが、死んだ……………」

父の遺体は、ある空き家の奥で見つかった。

元の住人が不意に姿を消して以降、どこからも放置された空き家。

その寝室で、父はベッドに横になって死んでいた。

大量の血液を部屋中に撒き散らし、しかし外傷はない。

死亡推定時刻によると、家を出たその日の夜に死んだらしい。

異臭がするという近隣住人の通報で、遺体が見つかった。

父は免許証を持っていたので身元特定はすぐだった。

ただし母へは全く連絡が取れなかったそうで、なので僕へ連絡がやって来た。

疲れ果てていた。

「……………」

僕は数々の供述その他を終えて、警察署から自宅に帰った。

頭痛はひどくなる一方で、手足は鉛のように重い。

父の死に事件性があるかどうかはまだ分からない。病気だったのか他殺なのか、はたまた自殺なのか。

僕は父のこと、については家の中のことを事細かく警察から聞かれた。妹に関すること

も。

結局父の遺体と面会することは出来なかった。

遺体の状態がひどく、そのまま見せることは忍びないという理由だった。

もうなんでもよかった。

僕は疲れていた。

だから、自宅の自分の部屋に入ったとき、うまく状況を理解できなかった。

「……………はっ。」

僕の部屋が、荒らされていた。

部屋の中の全てがひっくり返されている。

折りたたみベッドも椅子もハンガーラックも、置き鏡もゴミ箱の中身もぶちまけられている。

そして一番目を引いたのが、

「机、は……？？」

机がない。

机が丸ごと、部屋の中から消えていた。

荒らされた部屋の中、ぼつかりと不自然な空白が出来ている。

僕の貯金が全部入った机。

それが、ない。

「……………」

なぜ。

空き巣？

頭が働かない。

空き巣なら妹が危ない。

空き巣が机を丸ごと盗むか？

頭が痛い。

妹のところへ行かないと。

なんで机だけがこの部屋で価値あるものだと分かった？

妹は無事なのか？

誰がここに入った？

「——お母さんが、もってつちやった」

部屋の入口から、銀鈴のような声がかかる。

僕は振り返った。目を瞠る。

そこに、妹がいた。

壁に手をつけて体を支えている、妹が。

ゆったりとしたネイビーブルーのネグリジエ。

そこから覗く白すぎる手足。胸元。内臓など無いみたいに薄い肌。蒼白に沈む、冗談めいて整いすぎた顔。

煽る蠱惑の朱唇。

唾を呑む。頭が痛い。

「母さん、が？」

妹は頷く。

哀しみに濡れる瞳の色に、僕の脊髄が熱をもつ。灼かれる。

久しぶりに見た妹の顔は、ひどく白い。

生気に乏しく、血の気のない白さ。

が、あの無自覚の、妖しいまでの艶美さだけは変わっていない。

唸ひとつ、唇ひとつ僅かに動かしたただけで、こちらの喉を鳴らしてしまう。

その妹が、僕に告げる。

「お母さんが、男の人達と一緒に兄さんの部屋に入ったの。すごい音がしてた。お母さんの怒鳴り声も。物をぶつ音とか引きずる音とかがしたから、ドアを開けて見てみたら……」

机を運び出してた。

「――」

僕はもう一度、部屋の中へ振り返る。

空白が穿たれた部屋。

何もかも壊された僕の部屋。

奪われた。

工場で我慢し、耐えて、積み上げてきたものが。

こわされた。

「は、はは……」

僕は部屋に腰を落とす。

力が入らない。

足を投げ出す。

笑いがこみあげてくる。

痛みと気持ち悪さだけが僕の中身。

涙さえ出ない。

うつむく。

僕はわらった。

わらう。

わらう。

脳みそも心も壊れたように。

わらう。

わらう。

わらう。

わらう。

わらう。

ふわり、
後ろから誰かが抱きしめる。

「——ごめんなさい……」

甘い匂い。

やわらかな感触。

耳朵を理性ごと痺れさせる淡い声音。

「私が、止めれば良かった。あの引き出しに兄さんのお金があるって分かってたのに。」

お母さんが出てくところを引き留めれば良かったのに」

妹が、ぎゅつと僕を抱きしめる。

柔らかさと柔らかさでできたものが僕の頭を包む。

鼓動を感じた。

僕は固まる。

「私がおつと頑張れば良かったの……私が、あのとき、おつと頑張つてれば」

ごめんなさい、と妹は言った。

泣いている声で。

「——私が悪いの」

「……………」

そのとき、なにかがきれた。
きれた。

だいなものが。

こわれてはいけないものが。

僕は妹から身を離し、座ったまま振り返る。

そしておもむろに妹の細すぎる肩を両手で掴み、

——その喉に噛み付いた。

「!？」

狼狽する妹。

僕は構わず両手を妹の体の後ろに回し、強く抱きしめて押さえ込む。

か細い体はいやらしいほど柔らかかった。

こちらの腕力を受け止めるような体。

僕は喉元を噛み、舌先で柔肌をなぶる。

抵抗が弱い。

片方の手だけ離し、胸元をまさぐる。

こちらの手がとろけるほど柔らかい感触。

折れそうなほど細いのに。

その差異におかしくなる

もう片方の手が拘束しながら体のあちこちを揉んでいく。

そのまま体重を掛けて前のめりになった。

押し倒す。

華奢で柔らかいものを僕の体が潰す。

喉に嘔み付いたまま。

腕で抱え込んだまま。

甘やかな匂い。くるう。

どこを触つても歓びしかない。

頭の痛みも気持ち悪さもどこかにいった。

腕の中、口と舌で感じるそれは、乾ききった喉を潤す水のように。

今まで苦しんできたものが全て拭い去られる幸福感。

よろこびが、目からこぼれる。
涙が。

「……泣いてるの？」

それが言った。

僕は首もとから口を離し、そつちを見やった。

床に仰向けにされたその顔。

そのすぐそばに、

僕の顔が目に入る。

「……」

鏡。

机の上の置き鏡だ。

顔が映っていた。

獣欲で口元が歪み、炯々と両眼を輝かせている男の顔。
妹と僕を嘲弄してくる連中と同じ顔。
魔獣が見せた陵辱者達と同じ顔。

僕の顔。
僕。

「——兄さんも、こうしたかったの？」

「ツ!!」

僕は電流を浴びたように跳ねて立つ。

見下ろす先に、妹がいた。

床に仰向けの妹。

しなやか髪が乱暴に広がり、

作り物のように何の感情もない貌。

乱雑にはだけられたネグリジエと、襟元から覗く白い谷間。

そして、首元に刻まれた齒形。

僕のこと。

妹がされたこと。

「う、あ、あ……」

音を立てて崩れている僕の中。

「ああ、あああ……」

全部が台無しになった音。

もうどうしようもなくなった音。

僕の壊れる音。

僕は銀色の鍵を装置に差し込む。

ナイコーポレーション製の異星転送装置はすぐに準備を完了させた。
寝台に僕は乗る。

二度とこちらには戻らない。

僕は異なる世界へ行った。

*** **

霧の塔から抜け出る。

周囲は濃い雲霞。

僕は叫びながら周囲の空気を吸い込んでいく。

際限なく。

筋肉が膨れあがり、体格そのものが大型化。

肉体が膨張する。

頭の中が灼熱に染まった。

僕は視る。

今までよりずっと遠くが見られる眼で、原住民の街を発見。

犬人の街。

僕はそこへ全速力で飛翔する。

超音速で。

風景が高速で後ろへ流れ去る。

街の中心部にそのまま落下。

激突。

衝撃と爆風。

巨大なエネルギーがキノコ雲を作る。

住民の犬人達はそれだけで大半が死んだ。

僕は息をさらに吸い込む。

体中が青く灯る。火花が散った。

熱線を吐く。

青い熱線。

かろうじて形を保っていた市街地の外周部を薙ぎ払う。

「……………来たな」

僕は地平線の向こうを透視する。

円形の大楯に乗り、地球人以上の速度で飛んでくる全身甲冑の騎士。

左手に方形の小楯。

右手に馬上槍。

原住民の守護者。

邪魔する者。

地球人殺し。

僕は睨む。

あれさえいなければ、僕はどこにでも行ける。なんだって出来る。

僕は自由になれる。

あれさえいなければ。

「殺してやる、地球人殺し」

そして始まる。
僕と地球人殺しの、最後の戦いが。

第6話：さいごこのわがまま

あなたはなにも欲しがらなかった

地平線の彼方へ熱線を放つ。

発射の余波で周囲の黒煙が吹き飛ぶ。

青い熱線が燃え盛る街を貫き、その遙か彼方へ到達。

地球人殺しに命中する。

——地球人殺し、大楯で受け止めた。

熱線が拡散。

八方に弾かれて青い華を宙に咲かせる。

大地が震動。

防御しきった。

「…………お前が邪魔だ」

僕は大地を強く踏み込む。

飛ぶ。

踏み込みの衝撃で街が爆発。クレーターが出来た。

僕は空気中の魔素を激しく吸収しながら地球人殺しへ迫る。

全身がヒグマのように巨大化。

爪と牙も先鋭的になる。

力がみなぎる。

飛ぶ。

地球人殺しがいた。

飛ぶ。

地球人殺し、大楯を構える。

ぶつかる。

空中衝突。

「——っ!!」

反動の衝撃に体がわななく。無視。

僕は両手で楯にのしかかりながら、咆哮。

押し込む。

楯が押し返す。拮抗。

地球人殺し、大楯の脇から槍で僕を突こうとする。

「おうああああつ!!」

僕の全身、放電。

青いスパークが周囲のあらゆるものを包む。

エネルギー波は障害物を回折し、楯の裏側へ侵入。

地球人殺しを稲妻が灼く。

「!」

騎士の体が跳ねる。

大楯の圧力が一瞬弱まった。

僕は深く吸い込む。

吐く。

熱線を浴びせた。

至近距離で放たれたエネルギーの奔流に、大楯が押し流される。

地球人殺しごと。

僕は空中で加速。

地球人殺しへ突進する。

騎士は押し返せない。

僕らはそのまま地上へ落下。

大地に突き刺さる。

巨大な土柱。

衝撃波が音速で駆け抜ける。

「ここは僕の遊び場だ」

僕は再び空中へ舞う。

無人の平野に穿たれた広大なクレーター。

その中心を見下ろす。

「ここなら何をしたらいい」

地球人殺し、鎧を焦がされ、土に塗れながら立ち上がる。

僕は睨み付けながら、さらに深く深く空気を吸った。

ピピピピピピッ

警告音。

魔素の安全量を超えてしまった音。

もうなんの意味もない音。
身体がさらに大きくなる。

「あつちに帰らなくていい」
骨格が歪む。

「妹のいるところに」

顔も変形。

犬や狐のように鼻先が伸びる。

顎が長大化し、牙の数が増えた。

「……………」

地球人殺し、僕を一瞥。

数瞬だけ見据えた後、

槍の切っ先を僕へ向ける。

僕は牙を鳴らす。

「お前が邪魔だ」

突進。

いつかの包丁のような刀剣状の爪。5本。
青白く帯電。

震動。

騎士へ振り払う。

楯の上から。

地球人殺し、楯ごと吹き飛ぶ。

猛烈な勢いで後ろへ弾き飛ばされた騎士。

僕は両手で地面を掴み、低い姿勢。

尻尾が伸びる。

包丁のような刀身が背中に何本も生え、背びれのような列を作る。

「ああああおおおおおっ!!」

拡張された体内にエネルギーを充填。

口の中へ集結。

エネルギー量に耐えきれず、頭がガクガクと震える。

そして発射。

——— 極太の熱線。

膨大な熱と光をあちこちにばらまき、反動で僕の体も押し流される。

——地球人殺しは、赤熱でガラス化した大地に仰向けになっていた。

楯と槍こそ無事だが、甲冑は大部分が融解している。

鎧の表面が泡立ち、どろりと崩れる。

関節部が癒着してた。もうまともに動かせない。

「見たか」

間近まで寄った僕は、騎士を見下ろす。

「これが地球人だ」

兜の装面は奇跡的に無事だった。

なので地球人殺しの顔は分からない。

その顔が、僕を見上げる。

僕は四つん這いになった。

騎士に覆い被さる。

……僕の全身は金属製の繊維で覆われていた。毛皮のように。

首の付け根から尻尾の先まで並んだ刀剣状の背びれ。

下半身より著しく肥大化した上半身。

前へ伸びた口と鼻。

牙の列からはみ出る舌。

獣の姿。

僕。

騎士の左腕を掴み取る。

「地球に戻らない地球人は、お前だつて倒せる」

腕の小手を一気に引き剥がす。

小楯ごと無理矢理に破壊。

その下から腕がさらけ出す。

青い皮膚の腕。

優美な細腕。

「……いつかここに移つても良かった」

僕は左腕の甲冑をさらに剥ぐ。

丸い撫で肩が露わになったところで、逆の右腕側をもぐ。

「地球にいたって何もいいことない」

両腕の装甲を千切ってから、胸甲を顎で噛み砕く。

形の良い鎖骨、ふるりと揺れる2つの胸乳が露わになった。

「でも妹がいたから。僕は兄だから」

青い胸を舌で舐め回しながら、蛇腹状の腰鎧をねじ切る。

兜と脚甲しか残っていない。

青い半裸。

「けど、もう兄じゃない」

僕は長く大きくなった顎を、全開に広げる。

ずらりと並んだ鋭い牙を、そこに近付けた。

青い股間へ、。

「あつちも——そう思ってるだろうから」

顎を、閉じる。

しなやかな瘦身。

ひどく艶然とした青い肌。

美しい曲線を描く地球人殺しのもとに、槍と大楯が戻っている。

大楯が蒼く灯る。

楯の一部が輝きながら変形し、騎士の裸身へ纏わり付く。

瞬く間に鎧へ変形。

地球人殺しが復活した。

……その姿が、掻き消える

「っ!!」

僕は両腕を眼前で交差。

そこに刺突が。

槍の切っ先。

槍が啼く。震える。

腕を砕こうと。

「うううおっおおおおおおおおお!!」

金属繊維の体毛が帯電する。

強力になった放電能力で電撃を騎士に浴びせた。

空気が分解。異臭を放つ。
地球人殺しは止まらない。

新しい甲冑が稲妻に灼かれても、騎士は微塵も怯まなかった。

大楯が僕らを上へ上へと押し上げていく。

上昇。

槍が恐ろしい振動数で僕の両腕を破壊しようとする。

破碎されそうになる腕へ、僕はありったけのエネルギーを集中し防御した。

斥力場、硬質化、複雑繊維化、超再生……

あらゆる能力を駆使して騎士の槍へ抗った。

だから気付かなかった。

僕らがいつの間にか、惑星の遥か上空まで昇っていたことを。

眼下に大陸。

それが浮かぶ大洋。青い海。

大海の果てでは、大きな雲が全てを包んでいる。紫がかった雲。

雲の壁が海を取り囲んでいた。あまりにも高い紫雲の壁。

違和感があつた。

どうして、

どうして、こんな高さまで来ているのに。

水平線が平らなんだ？

そんな僕の視界も、急に濃い霧に包まれた。

何も見えない。

地球人の透視能力をもつてしても、何も感知できなかつた。

霧は雲に変わっている。

いつの間に、どこから霧雲がやってきたのか分からない。

感じ取れるのは、雨の音。

雲の中で雨が降っている。

そしてまた不意に、体に雨が叩き付けられる。

赤い雨。

それに触れた途端、

力が抜けた。

「っ!?!」

エネルギーが制御できない。

やられる、と思ったが、あの猛攻も消失していた。

地球人殺しの方も、僕と同様に赤い雨を浴びて飛べなくなっている。

落下する。

雲を抜け、地上が高速で迫った。

そこでやつと力の制御が戻る。

僕は空中に留まろうとした。

かなわなかった。

地球人殺しが落下速度そのまま僕に衝突する。

僕は落ち続ける。

地球人殺しが肉薄してくる。

僕は魔素を吸い込み、顎を大きく広げる。

全身が帯電し発光。

熱線を吐き出す——直前、地球人殺しが左腕を突き入れる。

僕の顎の中へ。

小楯、変形する。

巨大な釘打ち機。太いニードルを備えて。

「!!」

発射された。

ニードルと、僕の熱線が。

同時に。

蒼い爆裂。

地球人殺しが、僕を見下ろす。

鎧はどこも罅が入り、破損している。

左腕は肘から下が消滅。

その破断面から煙を上げて修復している。

騎士は槍と楯を宙に浮かせていた。

その槍が、僕の左腕を刺し貫く。

「！」

鋭い切っ先が腕を貫通し、地上に縫い止める。

と同時に、大楯が僕の右腕を押し潰す。

こちらも強力な圧力で、僕の自由を奪う。

僕は大の字に拘束された。

そんな僕に、地球人殺しは馬乗りになる。

そしておもむろに殴打した。

右腕で。

僕の顔を。

「!？」

殴る。

なんの超能力も使っていない。ただの殴打だ。
殴る。

再生中の僕の顔を、ガントレットが潰す。

殴る。

殴られた箇所を僕は修復する。

殴る。

修復する。

殴る。

修復する。

殴る。

殴る。

修復する。

殴る。

殴る。

殴る。

殴る。

修復する。

殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。

……修復速度が、殴り潰す速度に追いつかなくなっていく。
なぜ。

理由はすぐに分かる。

地球人殺しの左腕は、まるで再生していなかった。鎧も同様だ。

残ったエネルギーの全てを、この殴る行為に注いでいる。

なぜ。

なぜ一気に仕留めない？

この殴打になんの意味がある？

……誰かが泣いている気が、した。

「——っ！」

僕は頭の再生をやめる。

顔が潰される。

破壊され、死んでしまうそのぎりぎり直前。

金属の毛皮が放電する。

それまでと比べればわずかな威力。

しかし甲冑が損壊したままの騎士はこれに耐えられない。

全身を仰け反らせ、力なく崩れる。

僕の右腕を封じる大楯の圧力が弱まった。

僕は潰れかけた頭のまま、右腕を振り回す。

5本の爪、空間に翻る。

「!!」

騎士、半分の左腕で咄嗟に防御。

守りきれない。

爪は騎士の左腕を根こそぎ千切り、兜、および装面の一部を剥ぎ取る。

長い髪が宙に広がる。

騎士、飛び退いて僕から離れる。

僕、立ち上がる。

「……………」

騎士は兜から癖のない長髪をこぼし、また唇から下を晒け出していた。

蠱惑的な朱唇。

形の良い顎。

地球人殺しは槍と楯を呼び寄せる。

楯を背中に背負う。

槍を握り、突き出す。

槍、高速振動。

「……決着をつけてやる」

僕は尻尾を伸ばす。体の長さの何倍にも伸ばし、もつともつと伸ばす。そこまで拡張した肉体の表面積全てで、空気中の魔素を集める。

全身が蒼く発光する。

潰れた頭を最低限に修復。

四つん這いに。

体を固定。

地球人殺しへ牙を剥く。

尻尾の先で、青いエネルギーが激しく輝く。

その輝きは背びれを次々と煌めかせながら、次第に頭部に近付いてく。

そしてうなじにある最後の背びれまで到達した高エネルギー。

僕は地球人殺しを見た。

兜越しに、目があった、気がした。

「

熱線を、放つ。

騎士、飛び出す。

大地を焼き払い大気を爆砕し、蒼い閃光が疾駆。

烈光の濁流は猛進する地球人殺しを呑み込む。

槍が最大振動数で極太熱線を分解しようとした。

だが叶わない。

大楯の推進力と馬上槍の超震動をもってしても、僕の最後の方である熱線は砕けない。
い。

逆に槍が負荷に耐えきれない。

次々と罅割れを起こしていく。

亀裂は槍を持つ主にも広がる。
地球人殺しが砕けつつある。

これが僕だ。

僕の苦しみ。

僕の中の凶暴だ。

なんであろうと砕けやしない。

誰であろうと。

砕けるもんか。

——馬上槍が、激烈に発光する。

同時、周囲の気圧が一気に下がった。

大気が喰われた。

僕らのいる場所の周囲から、隣接する大気が急激に注ぎ込まれる。

爆発的な低気圧。

空気の渦。

竜巻が生まれる。

周囲の土埃や諸々の全てを吸い込み、渦の柱が天空へ突き刺さった。

その竜巻の中で、僕らは対峙。

竜巻の中心、空気を丸ごと呑み込んだのは、地球人殺しの槍だった。

槍を構成する物質の全てが閃光を放つ。

白い閃光、青い熱線を弾く。

光輝そのものになった槍、姿を変形。

先端から円盤。

円盤は剣山のように4つのブレードを伸ばす。

4つのブレードごと、円盤が高速回転。

光の渦を作る。

閃光の螺旋。

輝きの塊。

「……あのとき、助けてくれたとき、すぐに分かった」

騎士の唇が、開く。

僕は瞠る。

「私を助けてくれるひとは、ひとりしかいないから」

騎士の背中の大楯が震動。

前へ推す。

騎士がくる。

「私のさいごを、あなたにあげる——」

地球人殺しが。

「っ!!」

青い高エネルギー密度の濁流を、光の螺旋が千々に砕いて突き進む。
嵐の中。

光の嵐の中。

エネルギーも魔素も何もかも荒れて狂い、叫ぶ空間の中を。

騎士は進む。

僕は力を放ち続ける。

力の全てを。

最後の一滴まで。

騎士は進む。

僕は放つ。

騎士は進む。

僕は放つ。

騎士は進む。

僕は放つ。

騎士は進む。

騎士は進む。

僕は放つ。

騎士は進む。

騎士は進む。

騎士は進む。

騎士は進む。

僕は叫ぶ。

騎士は進む。

僕は叫ぶ。

僕は叫ぶ。

僕は叫ぶ。

僕は叫ぶ。

騎士は進む。

騎士は、来た。

僕のところへ。

僕は、涙した。

騎士は、笑った。

「犬カフェ、いきたかったね」

一条の強烈な光芒が、僕の胸を貫き抉る。

槍の刀身は膨大な量のエネルギーを破壊の衝撃波として解放した。

それは僕の肉体を破碎するに留まらず、

反動で騎士自身にも襲い掛かった。

騎士の鎧がもぎ飛られる。

兜も。

騎士、顔を露わにする。

冗談みたいに整いすぎた顔。
知っている顔。

僕の

僕の、妹。

光が彼女を引き裂く。

光が僕を砕く。

莫大な破壊の光が、
全てを終わらせた。

こうして。
僕らは散った。

地球人と、地球人殺しが。

僕らは、二度と地球人としてこの惑星に来られなかった。
二度と。

……地球人としては。

第7話：異世界転生

壊れた蛇口のように血を吐き出す。

信じられない量の液体が、僕の口から吐き出される。

生命力を司る液体。

それが次々と溢れ出る。

止められない。

……いったいどれほどの時間、それを垂れ流していただろう。

404号室。

転送装置の部屋。

その部屋の床が、血の池になった。

「……………」

体の感覚が薄い。

意識も曖昧だった。

恐ろしいほど眠い。

体の重ささえもう感じない。

自分がどう立っているのかも分からない。

分かっているのは、

「あいつは……………」

僕は部屋を出る。

家へ向かう。

*** ** *

外は土砂降りだった。

その中をどう帰ったのか、憶えていない。

気付けば自分の家に戻っていた。

家の、妹の部屋。
扉は開いていた。
妹はそこにいた。

血の海の中で。

「……………」

床に横たわり、口から大量の血を垂らしている。

手には、黒い紙切れ。

紙に描かれているのは、銀の鍵と転送装置のデザイン画。
ナイコーポレーション。

「……………」

僕は妹のそばに身を寄せた。

視覚以外は全てが鈍い。

感覚のない手で、妹を抱き起こす。

血で汚れた頭を撫でた。

感覚が薄い。

あの獣のような衝動も、今はなかった。

ただ、妹の髪を撫でる。

そして、妹が目を開いた。

「……………」

口を開こうとする妹。

動かせない唇。

分かる。もう何も出来ない。

僕は妹の手を握った。

妹は目を細めた。

微笑んだ。

そして、目を閉じる。

もう開かなかった。

「……………」

僕は妹を抱きしめた。
血に浸る部屋で。

僕は致命的なほど魔素を吸っていた。
妹はもつとだ。

魔素が僕らの命を奪う。
助かる方法はひとつだけ。

「……」

僕は妹を抱え上げた。
どこにまだそんな力が残っていたのだろう。
あのお気に入りのコートに妹をくるむ。

そして、廃工場を目指した。

簡単な話だ。

また惑星Xにいけない。

あつちなら魔素は毒にならない。

地球では生きられない僕らだけど、惑星に行きさえすれば。

ずぶ濡れになって廃工場に辿り着いた。

あとは404号室に行けばいい。

廃工場の廊下を歩く。

なのに、

404号室なんて、なかった。

「……………え？」

その廊下には、403号室までしかなかった。

404号室という部屋は存在しない。

隠し部屋を設けるスペース自体、そもそも残っていないなかった。

404号室という部屋は存在しない。

「……」

僕は廊下で途方に暮れる。

なぜ。

殺されたから？

だけど部屋自体が無くなったことなんてなかった。

どうすればいい。

どうすればいい？

僕は妹を工場の廊下に置く。

微動だにしない、血で汚れた妹。

彼女を見て、気付く。

妹は自分の転送装置を持っていた。

あの黒い紙だ。

あれに何か書かれているかもしれない。

そう信じるしかない。

僕は妹をその場において、来た道を引き返す。
妹の頬を撫でて。

廃工場の前。

土砂降りの雨。

ろくに街灯がない道。

暗黒。

感覚の薄い僕。

考えられない僕。

だから気付かなかった。

2つの強烈な光。

低く重いエンジン音。
クラクシヨン。

┌
└

衝撃。

宙を舞う、僕。

最後の力がしんだ

そのトラックが、赤いテールライトを残して闇の中へ消える。
トラックに轢かれたのだと理解できたが、そこまでだった。

地面に横たわる僕。

指ひとつ動かせない。

雨の感覚はない。

なにもかんじない。

ねむい。

ああ、でも。

妹を、あつちに送らないと。

こつちでは生きられないから。

妹を、助けないと。

こつちでは誰も助けてくれないから。

誰も僕らを助けないから

……暗闇に、男が立っていた。

黒い男が。

黒いロングコート。

黒い顔。

服も肌も、信じられないくらい光を反射しない。

輪郭も凹凸もはつきりしない。

まるで黒い塊が人の形を取っているかのよう。

その男が、暗黒そのものの双眸で僕を覗き込んでいた。

だれ？

そう思いながら、僕の意識は小さくなる

*** **

気付けば、僕はどこかの寝台に横たわっていた。

404号室に似ている部屋。

けど何かが違う部屋。

どう違うのかは分からないが、どこでもないどこかのような部屋で。
転送装置の筐体があった。

そのの前に、あの黒い男が立っている。

彼は銀の鍵を差し込み、何か調節をしていた。

それが終わると、彼は床から何かを抱え上げる。

妹だ。

コートにくるまれた、僕の妹。

彼女を僕のそばに横たわらせる。

転送装置が動き始めた。

黒い男が僕らを見下ろす。

だれ？

僕は声も出せず、薄い意識の中だけで尋ねた。

すると男は、懐から何かを取り出し、僕に見せる。

名刺だった。

2枚。

『 』
” 万古なる者をあやす会 副会長
『 』

読めたのは肩書きだけ。

名前は読めない。

書いてあるのだが、なぜか認識できない。

名前の中に大量の意味があつて、脳みそが処理できないかのよう。

それに、もう僕は何も考えられなかったし、感じることもなかった。

消えていく。

動き出した。

転送装置が。

眠い。

妹をみる。

一緒に行こう。

犬の大量にいるところ

あつちにあるかもしれない。

行こう。

あつちへ。

そうして。

僕の意識は消えた。

*	*	*	*
*	*	*	*
*	*	*	*
*	*	*	*
*	*	*	*
*	*	*	*
*	*	*	*
*	*	*	*
*	*	*	*

僕の体は、人間ではなかった。

オオカミのような胴体。

恐竜のような四つ足。

ヘビのような長い首。

ウツボのような頭。

トカゲのような尻尾。

コウモリに似た翼が2枚。

何にも似ていない獣だ。

手にはあのコートを抱えている。

コートにくるまれた、ひどく小さなもの。

僕は翼をはためかせて飛翔する。

どこだ。

雲の中。

知っている。

霧の塔だ。

僕は飛んだ。

目指す場所は決まっていた。

飛ぶ速さは人間だった頃とは比べものにならない。

地球人殺しよりも早い。

つまりこの惑星の何よりも早かった。

だからすぐそこに辿り着いた。

原住民の街。

犬人の王国。

地球人殺しが守った場所。

……その広場に、僕は舞い降りる。

犬人達が集まってくる。

武装した犬人や、そうでない犬人。

僕は広場の中央に、コートを置く。
その中に、小さな小さな生き物が。

——
犬人の赤ん坊。

犬人たちがざわめく。

僕は自分の体を抉る。

その中から骨を2本、引き抜く。

骨は瞬く間に形を変えた。

馬上槍と、円形の大楯。

犬人、さらにいつそうざわめく。

僕は赤ん坊の横に、その2つの武器を置いた。

あとは、ただ、待つ。

しばらくすると、ひときわ身なりの良い犬人が現れた。

護衛が何人かついてきた。

しかしその犬人は僕の目を見詰め、しばし目を合わせると、その護衛を下がらせた。

威厳のある犬人はひとりで僕と赤ん坊の前にくる。

そして赤ん坊を抱き上げた。

僕を見上げる。

そして厳かに深く僕へ告げた。

言葉は分らない。

しかし獣の異能なのか、その意味は理解できた。

勇者の生まれ変わりとして、

王国は深くこの嬰兒を愛し、

永遠に守ることをあなたに誓う

僕は頷く。

犬人は再び頭を下げた。

そして見守る他の犬人へ、赤ん坊を高く掲げて見せ、高らかに吼えた。

全ての犬人が吼えて返す。

共鳴して重なり合い、どこまでもどこまでも遠吠えが続く。

祝福の遠吠え。

僕はそれを浴びながら羽ばたき、犬人の街から去る。

赤ん坊は女の子だ。

灰色の毛並み。

飛び去った僕の瞳は、遙か遠くから飛来するものに気付いていた。

青い肌の地球人達。

霧の塔からの来訪者。

僕は空気を吸う。

魔素で力がみなぎる。

戦いに向かった。

最終話：見守るまどろみ

どれくらい年月が過ぎたのか、正確には分からない。

分かるのは、あの赤ん坊の犬人がすすくと育ち、幼女から少女へ成長したこと。

少女は強かった。

無敵だった。

地球人も魔獣も、おそらく僕よりも強い力を持っていた。

子供と大人の中間の歳になった少女は、その途方もなく強力な力を発揮して犬人の国を守護していた。

その歳になるまで、犬人の国に襲来する全ての地球人と魔獣は僕が倒してきた。

しかし今や、この国に僕はいらぬ。

少女は犬人達の中で尊敬され、好かれ、愛されている。

幸せに暮らしている。

だから、僕は大人の国を離れた。

*** **

僕は海岸を飛んでいた。

特に行く当てもない。

空気だけを食べていけば充分なので、どこにでも暮らせる。

地球人だった頃、そういえばこの惑星を隅々まで探検したことがないなど思い立っ
た。

制限時間という枷がない今ならどこまでも行ける。

そう思い、こうして大陸の端まで飛んでみた。

大陸を囲う大海原。

海が青い。

海水そのものが青かった。

どこまでも続く海岸線。

……そこに、僕はあるものを見つけてしまう。

「？」

移民達だ。

羊人の。

みんな荷物を背負い、幌馬車や荷馬車をいくつも牽いていた。

海岸から内陸へ向かっていく。

内陸へ？

「こいつら、どこから来た？」

僕は飛ぶ。

そして地球人よりも優れた両眼で海岸中を走査する。

すぐに判明した。

——海の中からだ。

海面から浮上し、荷物を背負ったまま浜辺へ上陸。

荷馬車や幌馬車も海の中から岸にあがってくる。

彼らの瞳には、生きている光がなかった。

自動的に動作する装置のように海岸から離れ、しばらくすると我に返ったようにあたりを見回し、そのまま旅を始める。

そのときにやっと生者の様相になる。

「いっくら……」

僕はさらに目を凝らす。人外の瞳は青い海の中を透視できた。そこで見つけたものに、身体が固まる。

海の水が、羊人になっていた。

水が別の物質になり、それが集まって人の形になっていく。

肉とも水ともつかないものが、海の中を歩いて進む。

あの幌馬車も衣服も生活道具も、やはり海水から現れていた。

海岸に近づくと、それらはまともな状態へ完成し、陸へとあがる。

「……………」

僕は、見てはいけないものを見た気分になった。

海に何かがある。

しかしそれを深く探つてはいけない予感。

僕の知らない脅威が海にある。

僕の眼でも見通せない水平線の向こう側。

大人の少女に迫るかもしれない脅威。

僕は翼に力を込め、水平線へ飛翔した。

海の色が変化していく。

海岸から離れるに従い、青い色から青紫に。

どンドン紫が濃くなっていく。

海は物凄く広がった。

大陸の大きさなど比べものにならない。

海こそが惑星Xの主領域だった。

僕の知っている大陸は、この大洋にぼつんと浮いた島に過ぎない。

その青紫の海をどンドン進んでいく。

そして、ついに果てらしきものを見つけた。

「……雲？」

紫色の雲だ。

それが水平線の全周から立ち上り、高々と天まで突き刺さっている。

雲の壁だった。

まるで転送装置の出口である霧の塔を密集させたかのよう。

僕の透視能力でも雲の向こう側は見透かせない。

僕は全身にエネルギーフィールドを展開。

あらゆる状況でも防衛できるような態勢を整える。

紫の雲の壁に、突っ込んだ。

* * *
* * *
* * *
* * *
* * *

赤い。

紫の雲の向こうは、赤い雲。

赤い霧が立ちこめている。

海の色もひどく濃い赤紫。

「っー」

僕は思わず空気の吸入をやめる。

魔素が濃すぎる。

空気中の魔素の割合が、雲の壁を越える前と違いすぎた。

「ハハハ……」

僕は慎重に飛び続ける。

赤い水煙がいつまでも続く。

空も青空ではなく、光のない、夜よりも暗い黒。

暗黒の空と赤い海。

僕はその間を飛んでいく。

行っただけはいけない、と僕は思う。

けれど進んでしまう。

行っただけでもう戻れない。

ただど行っただけで済む。

この奥に何かがある。

体中の魔素が知っているもの。

魔素の故郷。

魔素の源。

僕は進んだ。

……そして、僕はみた。

『それ』を、なんと形容すればいいのだろう。

とにかく巨大だった。

人間と比べれば、世界最高峰の山脈を数十倍は大きくしたような高さがあった。

厚みはとても分らない。

僕の眼でも解析できない。

赤い海に『それ』が横たわっていた。

なんの物質で出来ているかも判然としない。

『それ』を形成する物質は、ときに固体でときに液体、また気体になったりもする。沸騰するかのように泡立ち、弾け、凍結し、流動する。

そのたびに亀裂が走る。

そこから赤い液体が瀑布となって海面に放出される。

……泡立っているように見えるのは、何かの口なのかもしれない、と僕は思った。

なぜならその気泡から謎の牙や舌らしきものが一瞬だけ作られ、判別不能な音波を不安定な波形で拡散していた。

口だとすると、

これは生き物？

僕は連想する。

してしまう。

だから、探してしまった。

眼を。

そう思った瞬間、

泡立つ謎の肉体に、

浮かび上がってきた。

——名状しがたい、究極の深淵のような、知性のない瞳が。

『それ』、僕を視る。

まどろみの眼で。

僕はありとあらゆるものをこわされた

恐怖が出血する。

精神が血達磨になった。

恐慌は正常を蹂躪し、逃避ただそれだけを望んだ。

なぜここに来たのかなど全く思い出せない。

とにかく上昇した。

全力で。

！
あれはなんだ、あれはなんだ、あれはなんだあれはなんだあれはなんだあれはなんだ

狂乱する。

その中で何かが囁く。

” 万古なる者 ”

僕は逃げた。

全速力で空の上へ逃げる。

しかし気付く。

この赤い海に横たわるものは、その胴体をどこまでも後方に伸ばしていた。伸ばされた胴体は天文学的な半径で弧を描き、まるで螺旋階段のように空へ渦巻いている。

だから、僕がどれだけ上空へ逃げようと、『それ』から離れることは出来なかった。

……つまり、この世界は、

螺旋を描く『それ』。

『それ』に囲まれる大海。

その大海の中心で塵芥のように浮かぶ大陸。

の3つで出来ていた。

その世界を、あのまどろむ瞳が見ていた。

そして、螺旋階段のような『それ』は上へ行くほど建造物に覆われていく。

その建造物の隙間から、ゲル状の肉体を持つ原形質の生物が垣間見えた。

何体も何体も、単調なフルートや太鼓のくぐもった唸りを響かせている。

陰鬱で非人類的な音の濁流に包まれながら、僕はどんどん精神をくるわしていった。
こころがとける

……上空のさらに上空で、紫の雲がかかっている。

僕はそれを越えた。

赤い雨。

上方の遙か彼方から注がれる、『それ』の赤い液体。
紫の雲が遮っていたもの。

魔素。

僕はそれを肉体に浴びる。

力の制御が出来なくなった。

心の制御はとづくに出来なくなっていた。

だから、僕は赤い雨の中を滅茶苦茶に飛び回った。

赤い雨が体に触れるたびに、僕の体の細胞から膜が消えていく。
細胞が融合する。

形を喪う。

ウツボのような頭も、トカゲの尻尾も、コウモリの翼も。

胴体や四肢も。

皮膚も骨も。

内臓も筋肉も。

脳も神経も。

心も意識も。

とける

とける。

とけておちる

僕は落下した

地上に落下。

街を丸ごとひとつ更地にする。

ここはどこだ。

見る。見る？ なにで？

もう目などない。

体の全てが目だった。

肉塊の体の。

犬のような耳と尾、爪を備えた生き物達の死体が見える。

見覚えがある生物。

僕は知っている。

ぼく？ ぼくはなんだ。

「~~~~~∴——~~~~~！~~~~~」

ぼくはなんだ？

ぼくとは？

思い出せない。

思い出せ。

思い出さないといけないものから。

ぼくはなにをしていた？

ぼくはなにがすきだった？

ぼくのぞみはなんだった？

それを考え、巡らせる。

触腕が肉塊から伸びる。

触腕は思考を形にする。

触腕の先端が、人の姿をとった。

「~~~~~」

細く、薄く、たおやかな肢体。

癖のないストレートの髪。

清楚な風貌。

それを裏切る、劣情を煽るほど白い肌。柔らかな曲線。

ぼくの———砕かれる。

女が公園で踏みつけた新聞には、廃工場から少年の変死体が見つかったという記事が掲載されていた。

が、女は気付かなかった。

女は息子から金を持ち逃げすることに成功したが、すぐ借金取りに見つかり、そのほとんどもを奪われてしまった。

どん底だった。

何をどうすればいいのかわからない。

……全部、あのだらしない娘のせいだ。

あれがもつとうまくやっていけば、と心の中で毒づく。

稼げるからこそ、大人との夜遊びをさせていたというのに。

「使えない子」

女は公園のベンチに座る。

煙草を探そうと苛立たしくバッグを漁った。

そこで気付く。

「なに、これ？」

一枚の封筒。

覚えがない。

訝しみながら、中身を見た。

黒い紙に、銀の鍵と謎のデザイン画が描かれている。

そして別の紙には、こう書かれていた。

『おめでとうございませす。あなたはナイコーポレーションの転送装置のテスターに選ば

れました』